

バリ村落におけるデサ・アダット（慣習村）とその変化

戸 谷 修

Desa Adat in Balinese Village
—Its Trasformation in the Past Twenty-Five Years—

Osamu TOTANI

1. 開発に伴うバリ村落の変化

本稿で対象とするバリ村落は、アジア諸地域における社会変動の比較研究というテーマとしての一地域である。この調査研究はわれわれが永年推し進めてきたものである。1972年の調査ではじめて訪れたバリ村落の一つ、プナティ村（Kelurahan Penatih）は、この二十数年間にバリ観光開発のなかで大きく変貌した。デンパサールから30kmほど離れているに過ぎないこの村は、当時バドゥン県クシマン郡の一つの行政村であった。1992年に、この村はデンパサール市に合併され現在に至っている。プナティ村の行政区（lingkungan¹⁾）別、世帯数および人口は表1の通りである。かつてプナティ村が属していた当時のクシマン郡は10ヵ村から構成された郡（kecamatan）であったが、これらの村は、現在ではすべてデンパサールにそれぞれ統合されてしまっている。また、1985年にはこの村は人口が増え行政に支障をきたすようになったこともあって、プナティ村とプナティ・ダングリ村（Kelurahan Penatih Dangri）とに分かれた。

経済開発に力を注いだスハルト前政権は、バリではサヌール、ヌサドア、クタに典型的にみられるように観光開発を積極的に推し進め、この二十数年の間に当地域を国際的にも評価の高い一大観光リゾート地につくりあげてきた。その結果、バリは観光開発のなかで大きく変わった地域、それほど変化のみられないところなど、地域ごとにかかなりの差がみられるものの、その変化の様相は表2に示したように地域別の産業別就業状況の変化に端的にあらわれている。調査対象地プナティ村はバリの観光リゾート地やデンパサールに近接していたこともあって、この村を当初訪れた1970年代のはじめ頃と比較すると、村びとたちの生活様式も大きく変わった。二十数年前といえばプナティ村にはまだ電灯もなく、夜の灯りを灯油を使っていた状態であったが、いまでは、どの家々にも電灯がひかれている。また、飲み水の調達状況についてみても、かつては井戸ないしは川から汲んできた水を飲み水として利用していた状況であったが、現在では全世帯の70%が水道の水を利用し、残りの10%がポンプ・アップして井戸から水を得ており、また井戸から手で水を汲み上げて調達しているものが20%となっている。また、煮炊きする場合のそれぞれの家庭の燃料は、かつては戦前の日本農村でみられたのと同じように近くの山野で採ってきた木々に頼っていたものであったが、現在では全世帯の85%がプロパンガスを、また残りの15%のもの

が灯油を使っているという。また、二十数年前には自転車すらなかったこの村に、街から集落へ通ずる道路では夕方ともなれば、一日の働きを終えて家路を急ぐバイクに乗った人々に出会うことも多い。ところどころでは、ハンド・トラクターを操作して水田を耕している農夫の姿にも出くわす。これらの事象は、プナティ村の村びとたちの生活が二十数年の間に著しい変化のあったことを知るに十分なものである。

しかしながら、彼らの生活様式が先に述べたように、すべて一様に大きく変わったわけではない。彼らの日々の生活のなかで行われている神々に捧げる供物、宗教的行事や儀礼の生活領域は、いまでも一昔前と何ら変わることはない。実に敬虔な信仰篤き人びとである。日本社会では、経済の論理が深まるに従って、次第に宗教的生活の領域は稀薄になっていったといわれているが、バリの社会では、日本のようなことは全くなく、経済の論理が彼らの生活に浸透したとしても、彼らの日々の宗教的生活は侵されることはなく、以前とそんなに変わることなく、それぞれの家庭で、また地域社会で真摯に営まれているといえる。この点を本稿では、彼らの社会の宗教的崇拝を中核として構成されているdesa adat（慣習村）に絞って考察することにした。

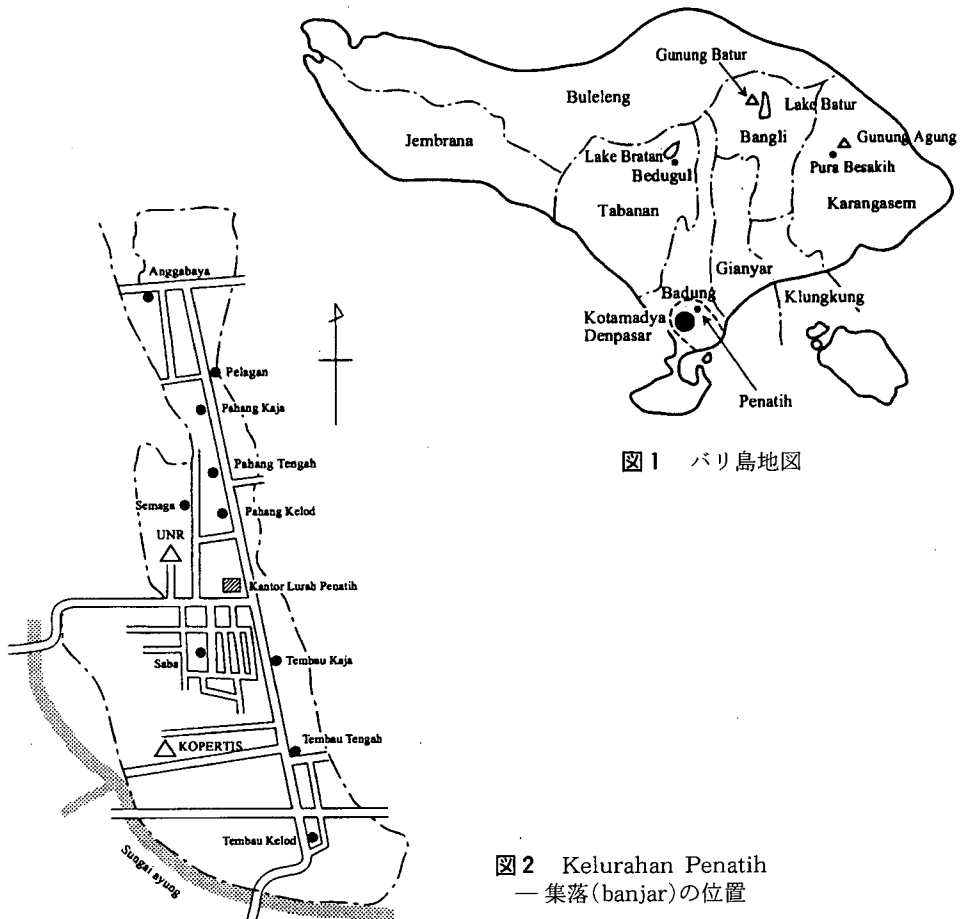


図1 バリ島地図

図2 Kelurahan Penatih
— 集落(banjar)の位置

バリ村落におけるデサ・アダット（慣習村）とその変化

表1 プナティ村のリングガン別世帯数および人口(1997年)

リングガン名	世 帯 数		人 口		面 積 (ha)	人口密度 (人/haにつき)
	1971年	1997年	1971年	1997年		
Anggabaya	104 ^戸	180 ^戸	526 ^人	757 ^人	77.82	973 ^人
Pelagan	56	82	278	403	19.73	2,043
Pahang	61	113	306	386	36.40	1,060
Pahang Kelod	99	220	556	952	36.34	2,620
Saba	99	156	522	743	30.33	2,450
Tembau Kaja	70	122	350	541	24.44	2,214
Tembau Tengah	36	137	186	655	32.50	2,015
Tembau Kelod	51	98	245	417	23.44	1,779
合 計	576	1,108	2,969	4,854	281.00	1,727

(出所)Profil Pembangunan Kelurahan Penatih. 1997/1998資料より作成。

表2 県別人口・就業者数および産業別就業者数の構成比

(単位:人・%)

県 名	年 次	人 口	就業者数	農 業・ 漁 業	鉄 鋼 業	製 造 業	電 気・ ガ ス 水 道	建 設	商 業・ レ ス ト ラ ン・ ホ テ ル	通 信	金 融	公 務	其 他・ サ ー ビ ス	其 他・ 不 詳
Buleleng	1971*	403,237 ^A	126,514 ^A	59.9 [*]	0.0 [*]	5.6 [*]	0.1 [*]	3.0 [*]	15.6 [*]	1.8 [*]	0.2 [*]	8.7 [*]	5.1 [*]	
	1996	566,038	227,315	49.4	0.8	8.3	0.0	5.6	18.1	3.2	0.9	13.1	0.6	
Jembrana	1971	172,006	62,271	76.2	0.0	3.5	0.0	2.1	9.0	0.6	1.2	5.6	2.8	
	1996	212,969	105,821	48.9	0.9	14.2	0.3	5.6	13.3	4.2	1.0	10.9	0.7	
Tabanan	1971	328,056	115,810	84.0	0.0	3.0	0.0	1.4	4.3	0.7	0.0	3.5	3.1	
	1996	375,474	195,925	56.0	1.5	10.6	0.1	6.6	10.2	1.7	1.0	11.4	0.9	
Badung	1971	400,283	131,662	49.9	0.0	7.9	0.3	3.8	14.6	2.8	0.5	14.8	5.4	
	1996	658,347	296,582	19.9	0.6	10.6	0.5	10.2	24.4	4.7	3.0	25.2	0.9	
Gianyar	1971	271,576	101,914	63.0	—	9.7	0.0	3.9	7.3	0.3	0.0	12.3	3.5	
	1996	348,492	183,333	31.6	0.7	32.2	0.0	7.2	13.0	1.6	1.3	11.8	0.6	
Klungkung	1971	139,307	53,332	61.1	—	12.5	—	1.9	15.2	1.5	0.2	5.8	1.8	
	1996	162,190	81,130	51.1	3.6	12.6	0.2	2.9	14.8	2.3	0.9	11.0	0.6	
Bangli	1971	138,327	47,900	86.4	—	1.0	—	1.1	4.8	0.8	0.0	4.8	1.1	
	1996	194,577	97,502	69.0	0.1	10.1	—	6.5	6.0	1.2	0.2	6.3	0.6	
Karangasem	1971	267,299	93,333	68.9	—	2.3	0.0	1.1	10.4	0.1	0.0	5.1	12.1	
	1996	355,988	164,447	58.9	2.0	11.3	0.0	3.4	12.9	1.5	0.5	8.9	0.6	
Bali 全域	1971	2,120,091	732,736	488,716 ^A	88 ^A	42,350 ^A	471 ^A	18,247 ^A	77,020 ^A	8,762 ^A	1,209 ^A	60,699 ^A	35,174 ^A	
	1996	2,874,075	1,352,055	596,604	15,093	183,946	2,549	89,515	210,586	37,355	17,905	189,538	8,964	
〃 構成比	1971		100.0 [*]	66.7 [*]	0.0 [*]	5.8 [*]	0.1 [*]	2.5 [*]	10.5 [*]	1.2 [*]	0.2 [*]	8.3 [*]	4.7 [*]	
	1996		100.0	44.1	1.1	13.6	0.2	6.6	15.6	2.8	1.3	14.0	0.7	

(出所)Sensus Penduduk 1971, Penduduk Bali, pp.226-227より作成

Sensus Penduduk 1996, Penduduk Bali, p.210より作成

(注)就業者数および産業別就業者数の構成比は1990年次の数、人口は1996年次の数値である。

1990年のバリ全域の人口は2,656,649人である。

2. desa adat と pura kahyangan tiga

インドネシアは全体からいえば、イスラム教徒が圧倒的に多数を占めている国である。しかし、バリだけについてみれば表3に示されているように、ヒンドゥ教徒が大多数を占めているところである。この30年間についてみても、バリにおける宗教人口の構成比には殆ど変化がみられない。

ところで、バリを訪れる人びとがバリを神々の島とよぶほど、バリにはヒンドゥ教の pura とよばれている寺院が実に多い。家々の sanggah とよばれる屋敷寺、親族の寺院、集落や村の寺院、市場の寺院、水田の中にある subak の寺院など様々である。それぞれの寺院を維持・管理していく場合、必ずそこには彼らの社会特有の社会結合組織がみられる。そのなかで、彼らがもっとも重要視しているものが desa adat (慣習村) である。

desa adat とは日本の村にみられる鎮守の社というべき pura kahyangan tiga (三カ寺) を共通にもち、一つの村の慣習法に従うメンバーの地縁共同体を指すことばである。この

表3 宗教人口の構成比の推移

() の数字は実数

地 域 名	全宗教人口	イスラム教	ヒンドゥ教	カトリック	クリスチン	仏 教
バリ州全(1971)	2,120,091 人	5.1 %	93.2 %	0.4 %	0.5 %	0.8 %
〃 (1994)	2,798,548	5.0	93.3	0.7	0.5	0.5
ハドゥン県(1971)	400,283	4.7	92.8	0.5	0.6	1.4
〃 (1994)	279,732	1.9	92.2	0.9	0.8	0.2
デンバサル(1994)	350,524	11.7	82.7	1.8	2.0	1.8
ブナティ村(1971)	2,969	0	100.0	0	0	0
〃 (1996)	4,854	実数(79)	(4,746)	(10)	(4)	(15)
〃	100.0 %	1.6	97.8	0.2	0.1	0.3
アングバヤ集落(1971)	526 人	0	100.0	0	0	0
〃 (1996)	757	実数(10)	(743)	(4)	(0)	(0)
〃	100.0 %	1.3	98.2	0.5	0	0

(出所) ・Biro Pusat Statistik Indonesia. Population of Bali: Sensus Penduduk 1971. Seri E. No. 14. 1974. pp. 46-47.
 ・Bali Dalam Angka 1994. p. 133
 ・Kecamatan Denpasar Timur: Dalam Angka 1996.
 Kantor Statistik Kotamadya Denpasar, pp. 41-42.

desa adatはpura kahyangan tiga への帰属と深く絡みあっているため、クリフォード・ギアーツによれば氏子組織ともいえるものである²⁾。また、この組織は共同体的規制によって再生産されてきた側面が強いので、この規制を実際に行ってきたbanjar (集落) との関係で考察せざるをえない。というのも、banjar は古くから desa adat のもっとも基本的な構成単位だからである。オランダの植民地政府によって行政村がまだ形成されていなかった時代には、バリの人びとにとっては desa adatこそが村 (desa) そのものであった。古くはこの desa は彼らにとっては世界そのものであり、さらに村の中心は pura kahyangan tiga であると考えられていた。この desa はまさに宗教的崇拝を中核とした一つのコミュニティであったのである。

ところで、kahyangan とは神々のための場所という意味でバリの人々にとって神域をさすことばである。tiga とは三つという意味である。その三つとは村の開祖を祀ったと考えられているpura puseh (pusehは「へそ」の意)、死者の霊を慰めるために建立され、一般には村びとたちの共同墓地の傍らにある pura dalem、もう一つは祭りの間降臨した神々の集まるところとしてたてられた pura balai agung (狭義の pura desa) である。バリの村人たちは、これらを総称してpura desa (村の寺の意) とよんでいる。pura puseh, pura dalemではバリ暦の1年すなわち210日に1度、またpura balai agungでは太陰暦の1年に1度祭りをを行っている。この祭礼のときには神々は天から降りてきて3日間とどまると信じられている。神々がとどまっている間、供物や儀礼などによって祭礼の義務を果たし、また平常の日々においても pura kahyangan tiga の維持に従うものが氏子 (njungsung) なのである。それぞれの desa adat に所属するものはその pura kahyangan tiga の氏子であり、その意味でバリの人びとはだれでもいずれかの pura kahyangan tiga の氏子に属していることになる。

3. pura desa の基本構造

ところで, pura desa (ここでは pura puseh, pura balai agungを合わせたもの) の構造は細部についてはそれぞれ著しく異なっている。そこでそのpuraを構成するもっとも基本的な構造をコヴァルピアスの描いたものによって示しておこう³⁾。図3がそれである。まず境内は djaban とよばれる外庭と dalem とよばれている内庭とに区切られている。境内に入るには、まず chandi bentar とよばれている割り門を通して djaban に入る。この門は一つの塔を真ん中から2つに断ち切ってならべたような形のものである。また、外庭の右角には kulkul とよばれる木鐘がつるされた警鐘塔がある。これは、祭礼の準備のための招集や儀礼への参集をうながしたり、ときには火事や泥棒などが発見されたときなどに叩かれるという。なお、外庭には祝祭用の食べものを料理する台所 (paon), ガメランの楽団のために設けられた小屋 bale gong, 参拝者たちの休憩所 balai などが建てられている。外庭から内庭に入るには paduraksa とよばれている門をくぐって入ることになる。この門は chandi bentar の左右それぞれの門柱を一つにつき合わせたような形で、地面から高くしてすえつけられている。入口は悪霊の侵入を防ぐための木の扉を備えた狭い幅のもので、その両側には入口を守るため raksasas の像が左右1つずつ置かれている。また、この門を入ったすぐ正面には aling aling とよばれる石の衝立が建っている。これらはいずれも悪霊が神域に入るのを防ぐためだという。djaban とよばれる外庭が祝祭の準備や会合のために使われるいわば俗界の広場であるのに対して、dalem とよばれる内庭は神々が地上に降下している間、神々のために憩いのところとなる祠や祭壇のある場所として使われるいわば浄界の広場である。われわれが許しを得て浄界の世界である内庭にはいるには、腰に黄色の帯を巻いて入ることになる。バリの寺でもっとも大切なものは境内に建てられている数々の祠よりも、その祠が建っている土地そのものであるといわれている。外庭、内庭が全く異なった性格のものである意味はきわめて大きい。主な祠は内庭の高位だと考えられている二つの方位に並んでいる。すなわち、山に向かう上方 kaja とその方位の右方 kangin である。祠のうち重要だと考えられているのは、kangin 側の中央に建てられている gedong pesimpangan とよばれている祠で、村の開祖のために設けられたものである。これを pura puseh とよぶ。また、kaja (山の方角) 側の中央には meru とよばれる塔がおかれている場合が多い。屋根は三重から十三重までの奇数の層で覆われ砂糖ヤシの idjak とよばれる繊維を厚く重ねてつくられたものである。外形的には日本の五重の塔によく似ている。神々はこの meru を伝わって降下してくるとバリの人びとには信じられていたが、現在ではこの meru のない pura desa が多い。アンガバヤの集落にある pura desa も meru はない。このほか、もっとも重要なものとして padmasana とよばれる祠がある。これは太陽神 surya のために設けられた石の玉座で、もっとも尊い方位と信じられている右手の角に設けられていることが多い。そしてその背は必ずアグン山のほうに向けられている。そのほか、多くつくられている祠としては、信仰の対象でもある Gunung Agung と Gunung Batur のために設けられた二つの祠、神々の通訳 taksu のための祠などがある。神々の決めたことを村びとたちに知らせるために神がかりになった霊媒を通して語るのはこの taksu であると信じられている。さらに Maospait とよばれる祠もよく設けられているものの一つである。この祠はマジャパイトからやってきた移民

のトーテム神,「始祖の鹿」manjangan seluang を祀ったものである。この祠は鹿の頭の形をした小さな彫刻が祠につけてあるのでよくわかる。

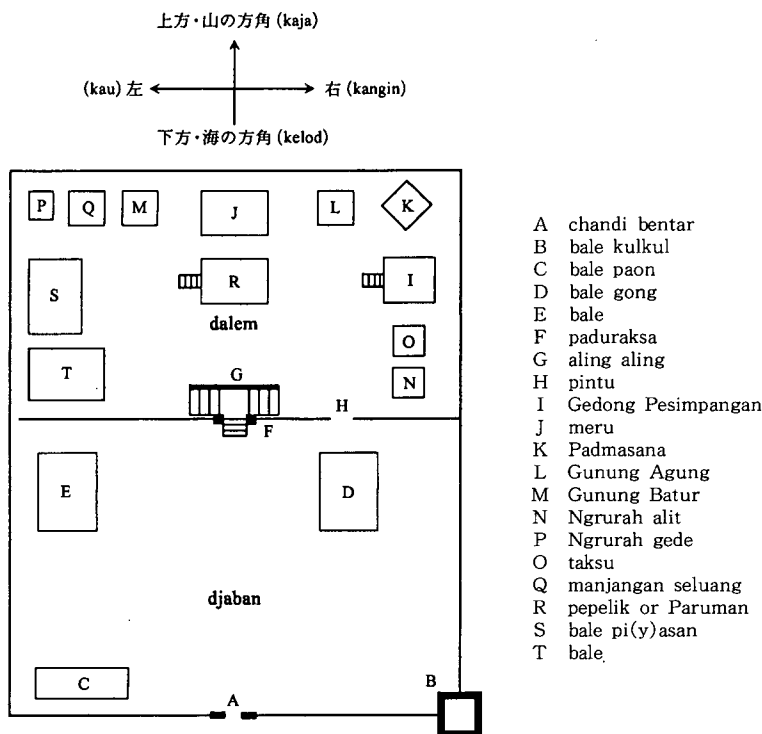


図3 プラ・デサの基本型

これら多くの祠のほかに内庭には、神々の会合の場所となる pepelik, 供物の置き場として使用されている bale piasan などが設けられている。以上は多くの pura desa にみられるもっとも基本的な構造の概略である。ここにはバリの人々の宗教意識がよく表れている⁴⁾。もっとも上記の構造は彼らの pura desa の理念型的なものである以上, pura kahyangan tiga はそれぞれの慣習村にそのままの形で存在するわけではない。クリフォード・ギアツによれば desa adat にある pura desa がすべてそれぞれ異なっているところに、バリの的な特徴があるとさえいっている。

4. アンガバヤ慣習村の pura kahyangan tiga とその pura を支える村びとたち

ところで、アンガバヤ集落の pura kahyangan tiga はどうであろうか。村の kaja 寄りのところに、pura kahyangan tiga が一カ所にきわめてコンパクトにまとめられて建てられている。多くの村では、pura dalem は村外れの共同墓地の傍らにあって、pura

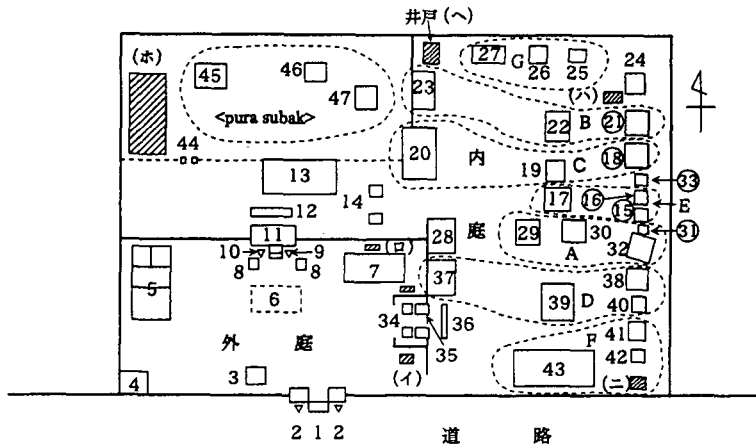
puseh や pura desa と同一の場所にないのであるが、アンガバヤの pura dalem は、pura puseh, pura desa と同じ境内にある。

pura dalem の存在理由について、1974年私とともにバリの調査を行った前田恵學教授は、つぎのように述べている。「バリ人の信仰によれば、死者の霊はすぐには純化されない。中有の世界において piratas として止まる。中有にある間は、生存者に非常に危険な存在たりうる。あらゆる手段で、人間に危害を加えることができる。その期間、かれらの魔力は黒く悪い。火葬やそれにつづく祭祀によって純化してはじめて死霊は天界に入り pitaras となる。その時、かれらの魔力は白く善いものとなる。死者の黒い力は pura dalem における儀式によって封じ込むことができる。pura dalem で行われる儀式は下界の悪鬼・悪霊に対する魔除けの祈禱である。……ひとたび死霊が完全に純化されれば、かれらは神格化した祖霊として pura puseh 等に移しまつられることになる」⁵⁾と述べている。

また、当集落の pura kahyangan tiga には、いまから300年も前、戦いで滅びてしまった隣村 Bun の pura kahyangan tiga も合祀されている。そのため、ここには二つの pura kahyangan tiga が同一境内に祀られている。この点も珍しい。さらに、興味深いことは、この pura kahyangan tiga の一角に、desa adat の祭祀集団とは全く関係のない subak の pura がつくられていることである。それらすべての配置図は図4の通りである。

まず、道路から chandi bentar(1)とよばれる門を通ると、境内の外庭に入る。外庭の角には kulkul をつるした警鐘塔 bale kulkul(4)が建っている。そのほか外庭にはガメランの楽団が座って演奏する panggungan(6)、祝祭のとき使用される調理小屋 bale paebat(5)、集会所 bale agung(7)などが建てられている。さらに正面の paduraksa(11)とよばれる門をくぐると、外庭から内庭に入ることになる。この門の前には、それぞれ一対の apit lawang(8)や raksasas が左右一つずつおかれている。また paduraksa(11)とよばれている門を入った真正面に、aling aling(12)とよばれる高い石製の衝立が立っている。そして、その内庭右手に pura puseh(18)、pura desa(21)があり、また前方左よりのところに subak の pura がある。内庭右手の奥のほうには、さまざまな祠が並んでいる。南部バリでは山の方角 kaja は北の方位、その方位の右方 kangin、つまり東の方角とが高位でもっとも清浄な方角とされているので、内庭の主な祠はこの kaja と kangin の方角に、境内の塀に沿って並んでいる。pura desa(21)、pura puseh(18)、一つの祠をおいて pura desa Bun(16)、pura puseh Bun(15)、padmasana(32)などがある。この padmasana を現在では最高神 Sang Hyang Widhi の座であると村びとたちはいつている。また、外庭の右手のほうには pura dalem のための chandi bentar(35)がある。この門をくぐると、その奥のほうに先に述べたさまざまな祠と並んで pura dalem の祠(38)がある。そして、一つの祠をおいて pura dalem Bun の祠(41)がある。

以上のように pura desa, pura puseh が pura dalem と内庭へ入る入口の門を異にするとはいえ、内庭にて同じように並べられている。それに対して、subak の pura は、同じ内庭にありながらも、pura kahyangan tiga とはっきり分けることを表示するためか、その subak の pura にはかつては塀で築かれて仕切られていた。しかし、現在はその塀はない。かつて塀で仕切られていたことは、pura kahyangan tiga と subak の pura とでは、



- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1. chandi bēntar | 25. pura ulundanu |
| 2. Raksasas | 26. ulun Taman |
| 3. walang tamak | 27. pi(y)asan & pengaruman |
| 4. bale kukul | 28. bale gong |
| 5. bale pacbat | 29. manjangan = Penyarikan |
| 6. panggungan | 30. pesambian |
| 7. bale agung | 31. pi(y)asan |
| 8. spit lawang | 32. padmasana |
| 9. Ravana | 33. gaduh |
| 10. Kumbakaruna | 34. spit lawang |
| 11. paduraksa | 35. chandi bēntar pura dalém |
| 12. aling aling | 36. aling aling |
| 13. gēdong perarepan | 37. pi(y)asan |
| 14. spit lawang Bun | 38. pura dalém |
| 15. pura pusēh Bun | 39. pengaruman |
| 16. pura desa Bun | 40. kahyangan |
| 17. Pi(y)asan | 41. pura dalém Bun |
| 18. pura pusēh | 42. pura kahyangan Bun |
| 19. pengaruman | 43. pi(y)asan |
| 20. pi(y)asan | 44. chandi bēntar pura subak |
| 21. pura desa | 45. pi(y)asan |
| 22. pengaruman | 46. bédugul (pura subak) |
| 23. pi(y)asan | 47. ulunsiwi |
| 24. luwuring akasa | |
- 1974年調査時点より新しく設けられた祠は [斜線] のところである。
- (イ) Linggih Ratu Nyoman (Sakti Pengadangan)
- (ロ) ulun Bale Agung
- (ハ) Gunung Agung
- (注) 1974年調査時点にあった (44) Chandi bēntar pura subak と pura subak を囲っていた南側に面していた塀は現在はない。-----□----- 印の部分
- (ニ) Pi(y)asan
- (ホ) bale (物入れに使用している)
- (ヘ) 井戸

図 4 Angga Baya のPura kahyangan tiga

社会結合組織が全く異なったものであったからである。なお、雑然と建っているようにみえる祠も、pura desaの関係者に聞くと、3～4の祠が一つのセットになってpuraを構成しているという。たとえばpura pusehについて述べると、pura pusehとそのためのpi(y)asanとpengarumanという最小限三つのものがセットになっているという。pi(y)asanはpengarumanの機能も果たす場合もあり得るという。このpura kahyangan tigaは図4に点線でそれぞれセットのものを囲っておいたように、7つのセットから構成されており、それを6名のpemangkuが世話しているという。村びとたちは、padmasanaは最高神であるから、pura kahyangan tigaに必ずワンセットのものがなければならないと言っていた。祠がすべて塀に並行して建てられているのに対し、padmasanaだけが他の祠とちがって塀に並行に建っていなかった。その理由は、padmasanaの玉座の背がアグン山のほうに向いていなければならないからだという。

また、□印のものは1974年の調査時点にすでに建っていたものであるが、その後全く新しくつくられたものは▨印で表示しておいた。たとえば、(ハ)のGunung Agungの祠であるが、その祠をつくったのは遠くブサキ寺院へ行かなくとも、その祠に詣でれば行ったのと同じ効力があるからだという。またpura subakの敷地内にかなり大きなbale(ホ)が建っていた。村びとたちにきくと、puraの物入れに利用しているのであるが、本当はこのようなものは聖なところにつくらないほうがよいが…と言っていた。村びとたちのpura desaによせる思いはきわめて強い。

ところで、プナティ村は1985年プナティ村とプナティ・ダングリ村とに分かれるまでは、Anggabaya, Pahang, Laplapという三つのdesa adatから構成されていた。desa adat Pahangは9つのbanjarからできており、desa adat Laplapも9つのbanjarからできており、desa adat Anggabayaだけがアンガバヤbanjarただ一つから出来た慣習村であった。10年前行政村プナティ村が二つに分かれたため、現在のプナティ村からは、desa adat Laplapを構成していた9つの集落がプナティ・ダングリ村に移っている。現在10の集落で構成されているプナティ村には、4つのdesa adatがある。Anggabaya, Tembau, Penatih, Penatih Puriの4つの慣習村である。desa adat Anggabayaは以前と同じようにアンガバヤbanjarのみから出来ている。desa adat TembauはTembau Kaja, Tembau Tengah, Tembau Kelodという3つのbanjarで構成されている。また、desa adat PenatihはPahang Kelod, Pahang Tengah, Pahang Kaja, Semagaという4つのbanjarでつくられている。また、desa adat Penatih PuriはSaba, Pelaganという2つのbanjarから構成されている。この30年間の経過の中で、かつてのPahang慣習村が3つのdesa adat（慣習村）に分かれたことになる。

われわれは最初に訪れた二十数年前、調査を手がけたさいアンガバヤbanjarを選んだのは、当集落がバリ村落のなかにあつて、desa adatを考察するうえでも、またsubakを考察するうえでもきわめて完結したbanjarであるという理由で選定したものであった。もっとも、このような集落は調査対象としてはきわめてすぐれた集落ではあるが、実際にはこのような集落はきわめて少ない。なぜならば、先にも述べたように多くの場合いくつかの集落の協力によってはじめてpura kahyangan tigaは維持されているからである。というのは、バリではこのpura kahyangan tigaをもつことによって集落ははじめてdesa adatになる。一つの集落で経済的にpura kahyangan tigaを支えられないような

banjar は、互いに協力せざるをえない。このアンガバヤ慣習村には bendesa とよばれる慣習村村長が選ばれて desa adat の運営にあたっている。また、このアンガバヤ慣習村の kahyangan tiga は 6 名の pemangku によって世話されている。6 名の pemangku は pura desa, pura puseh, pura dalem, pura Bun, pura Ratua⁶⁾ をそれぞれ担当している。そして、アンガバヤの desa adat の pura kahyangan tiga の pura でそれぞれ行われる祭礼には、その pura を担当するそれぞれの pemangku が儀礼をとりしきっている。

アンガバヤ慣習村では、他の desa adat と同じように、それぞれの pura ごとに、ある定められた日に神々の降臨を仰いで祭礼を盛大に行っている。彼らの寺院の祠の中には、キリスト教におけるキリストの像のような信仰の対象とする特定の偶像は全く入っていない。バリの人びとによって想定された神々は、目に見えず手に触れることのできないものである。彼らの宗教観によれば、彼らの祖先の霊は一定の年月が経過し、定められた祭祀（火葬を含む）を行うことによって浄化され神となる。そして、その神々は高い山々に住みつき、祭礼のときにのみ村に降りてきて、さまざまな幸せを村びとたちに与えるものだと信じられている。この祖霊観は、日本の村落に古くからみられた民間信仰⁷⁾にきわめて類似したものである。日本の各地には、戒名をもった死者の祭祀を33年忌とか50年忌とかをもって打ち切り、その後は先祖として祖霊の祭りに統合するという弔いあげの習俗がある⁸⁾。そして、この弔いあげをした後の祖霊は、山の神となって山にのぼり、折々の祭りには村里に降りてきて里の神、田の神となって村の守護神として村びとたちに幸せをもたらすものと信じられているが⁹⁾、こうした祖霊観はバリのそれに非常によく似ている。

バリの村びとたちは祭りによって神々を自分たちの村へ迎え、ひたすら止まってもらおうと願うのである。祭壇に山と積まれた美しく色とりどりに飾られた供物、快いガメランの響き、丹誠をこめた優雅な踊り、すべては神々をよこばせ、神々が立ち去られないように願う村びとたちの深い信仰から生まれたものである。彼らの祀る pura desa は、単に村の守護神であるばかりでなく pura puseh に端的に示されているように自分たちの先祖神と合一したものである。村では、村を開いた先祖を pura puseh として祀っていることから明らかである。一つの血縁集団は一定の地域を生活領域とする限りでは地縁集団でもあるから、そこに彼らの集団の先祖を守護神として祀ったとするならば、それはその生活領域の集団の鎮守の神ともなるのは当然のことである。たとえ、その範囲に非血縁の人びとが含まれていても、その地域の守護神であることには変わりはない。このような考え方は、集落の村びとたちがすべてその pura kahyangan tiga の氏子となりうる根拠である。バリ村落の神々は基本的に生活集団の守護神であるから、個人がばらばらに神と直結するのではない。個々人は集落、親族集団、家族というような、さまざまなレベルの生活集団と一体化して彼らの属する集団の守護神に庇護されるのである。この点は、個々人が神にそれぞれ直結する西欧社会に典型的にみられるキリスト教の場合と根本的に異なる点である。彼らは祭礼を行うことによって互いの共属意識を確かめあい、コミュニティとしての一体感をかためなおしているのである。

祭礼の費用については、1980年代のなかばごろまでは水田をもっているものからの収穫物の徴収、ならびに当慣習村のメンバーへの賦課金によって支えられていた。1998年現在の聞き取りによれば、一つの pura で行う一回の祭礼には約400万ルピアの経費が必要だという。アンガバヤ集落には慣習村自体の水田をもっており、かつては、この水田からの

収穫物を売って祭礼の費用や改修工事の費用に当ててきた。しかし、現在では、村の寄り合いで pura desa の水田から得られる収益は専ら寺院の改修工事費用のみに当て、祭礼の費用は6ヶ月ごとに1世帯につき4万ルピアずつを徴収する納入金を充当することになったという。また、寺院の大規模な修復工事を行い多額の費用を要する場合には何回も desa adat の寄り合いを開いて、話し合いで決定しているという。どのくらいの経費がかかるのか、どこから改修するか優先順位を決めたり、いつ頃から改修工事にはいるか、寄付金を徴収するにはいつ頃か行うか、その金額は1度に納入するのか、何回にわけて分納するかなど細部にわたって話し合われている。pura kahyangan tiga の改修工事など重要な会合をリードし、さまざまなことを決めていく執行組織としては bendesa adat（慣習村村長）と、そのもとにいる3名の klian tempekan¹⁰⁾ によって構成された氏子組織の執行機関が当たっている。

5. desa kalapatra と共同体的規制

それぞれの慣習村 desa adat には、そのメンバーが守らなければならない掟がある。この掟は desa kalapatra といわれ、不文律のものが多く、アンガバヤの場合も不文律のものである。この慣習法は desa ごとに神、祖先、僧侶、悪霊に対する儀礼的行為の規則、結婚・相続・通過儀礼などの一定のきまり、慣習村の正式メンバーに関する条件などを定めている。そして、banjar のメンバーがこの掟に違反した場合には厳しい制裁が行われている¹¹⁾。ある者がこの掟を破ったときには、慣習村々長 bendesa が違反者の所属する集落の集落慣習長 klian adat に伝え、彼は直ちに集落の会合を開き、違反者の処罰を決めるという。この場合の集会は裁判所の機能を果たすのである。一般にもっとも重い罪は、banjar とよばれる集落の福祉を著しく棄損したもの、とくに寺院破壊、放火、刃傷、殺人というような行為である。かつてはこの集会で犯人の斬殺処刑も行ったという。このほか、慣習村の掟に定められている村の義務を終始怠った者、科料の支払いを拒否した者、度重なる集会欠席、姦通、近親相姦、幼女凌辱、妖術行使なども重罪と考えられている。バリの慣習村は、一方では祭祀などを通して共属意識を高めているとともに、他方では共同体規制を厳しく行うことによって村落社会の秩序を維持してきたといえよう。

desa kalapatra は、この20～30年間にどのように変わったかと村びとたちに尋ねると、彼らは変わっていないという。というのは、desa kalapatra は、基本的規則はなんら変わらないが、具体的な処罰への対応については時代の流れのなかで柔軟に対応できるからだという。たとえば、ゴトンロヨンで村の清掃にでなければならないある人がその労役を怠った場合、その欠席した理由が、身内のものが病気で看病しなければならなかったということであれば、欠席しなければならなかったその時の状況を十分考慮して、処罰に対応しているのだという。このように、desa kalapatra に示されている原則は、変えることなく運用できるのだというのが村びとたちの見解である。現在のところ行政村村長 kepala desa は、慣習村（desa adat）が従来からもっていた宗教ならびに生活慣習上の諸事項に関しては、いっさい関与せず、すべて慣習村の長 bendesa に委ねてきている。このような意味で、バリでは政府の末端機関である行政村は慣習村の従来からもってきた役割領域を侵すことなく慣習村の自治を大幅に容認してきたといえよう。

さらに、行政村ならびに慣習村との共通の構成単位となっている banjar についてみると、集落の生活慣行や宗教に関する問題は、banjar の klian adat (集落慣習長) によって、また集落の一般行政に関する問題は banjar の klian dinas (集落長) によって処理されている。そのような意味で、両者は役割分担を明確に分けつつ、機能的に補完しあう関係にある。このような点で banjar は行政村と慣習村との両者の機能を事実上行っていることになる。具体的に言えば、banjar では集落の寄り合いが1ヶ月に1回必ず行われている。そこで、話し合われている事柄は、第1に集落の費用に関することで、各世帯から徴収すべき金額の決定などについて話し合う。第2に寺の祭りに関することで、pura kahyangan tiga の祭りの費用、そのさいの仕事の分担などについて話し合う。第3には集落のメンバーシップに関することで、構成員の転出入、結婚、離婚、相続の承認などについて話し合う。第4には慣習法に違反したものに対する制裁についての話し合いで、違反したものに対しては、科料に処したり、さらには追放してその宅地を没収するなどを決めている。これらの問題の処理にあたっては bale banjar とよばれる集落の集会所において、すべての世帯主による話し合いを通して決定されている。そのさい、集落の行政上の問題ならば klian dinas が、また、宗教ならびに生活慣習上の問題ならば、klian adat がとりしきることになっている¹²⁾。

banjar の正式メンバー (anggota) としては、世帯を単位とし、通常夫が世帯主 (kepala keluarga) として集落の会合に参加している。バリの人びとは、一般に一つの banjar にしか所属することはできない。なお、集落の運営費は banjar 内の水田所有者から徴収される収穫物の一定量と、banjar のすべての世帯から均等に徴収される集落費とからなっている。前者についていえば banjar 内の水田での収穫は、1人ずつ各世帯から参加する共同労働で行い、その収穫物の一定量を banjar に納めるものである。かつての現物納は現在は現金で納めるようになっている。この労働賦役に参加しなかった者は、罰金として一定額の金額を支払わなければならない。この罰金のことを denda とよんでいる。なお、続けて2～3回無断で参加しなかった者に対しては、集落の寄り合いで議題にかけ、厳しく罰することになっている。集会が3回開かれている間に違反者が自らの罪を認めない場合には、彼のメンバーシップを6ヶ月間剝奪し村八分にするという。共同労働のさい、自分が都合が悪くて出席することの出来ないときには、他の人に頼んで自分の代わりに参加してもらうこともできる。banjar の支出の主なものは、集落の集会所、ならびに pura kahyangan tiga の修理・改築費、村祭りの費用、それぞれの家で行う火葬への補助金などである。

なお、収穫のさいの労働賦役のほか、集落が課す共同労働としては学校、市場、集会所、pura desa など公共施設の修築、ならびに pura desa の祭り、葬式などの儀式への参加などがある¹³⁾。このさい、参加しなかった者に対しては、収穫のさいに述べたように罰金が科せられている。banjar の労働賦役、収穫物の一定量を納入すること、掟に違反したものに対する制裁、集落単位とした宗教儀礼への参加など、バリの banjar には、アジアの共同体の共同体規制を連想させるものが実に多い。

以上述べたように、バリ村落の banjar では現在も共同体的規制が強く機能していることを確認することができるが、このことは同時に banjar 内の自治がいまだに強く機能していることを意味している。banjar のすべてのことはすべてのメンバーの話し合いで決

められていくことは先に述べたとおりである。したがって、この banjar の人びとの結びつきは、かりに強力な中央政府の計画に対しても、村びとたちが一応納得して同意でもしないかぎり、バリでは推進されないこともありうるといえるほど強い。事例として1997年、政府が推し進めようとしたバリのリゾート開発にアンガバヤ banjar の人びとが強く抵抗し、政府のリゾート開発計画を撤回させた事件に端的にみられる。

この事件は政府がバリ・サヌールのリゾート地域をより拡大しようとして、サヌールの海岸、パンダガラを開発の対象としたことからひきおこったものであった。パンダガラは古くからアンガバヤ慣習村の村びとたちが毎年、バリ暦のニエピーの前日、その海岸へ行って1年の汚れを流し落とす儀式、ムリス（melis）というウパチャラをやっているところだった。彼らにとっては、その聖なる地がリゾート開発でなくなることは、自分たちの一人一人の宗教的信仰心がふみにじられることだった。村びとたちは反対運動に立ち上がって、強力な運動を展開し、政府の進めようとしてきた開発計画を撤回させたすばらしい結果を生んだものだった。もっとも、この闘いは、この観光開発が、国家的事業というよりは、スハルトのファミリー・ビジネスの一連のものだということで、反対運動をより一層強力なものとしたことも事実である。しかし、より重視しなければならないことは、この闘いに結集した村びとたちの心の根底には、ヒンドゥという宗教で結集した banjar の人びとのアイデンティティが強力に働いていたことを見逃すべきではない。

6. バリ・ヒンドゥ変容の様相

いままで、慣習村ならびに pura kahyangan tiga について述べたかかわりで、最後にこの二十数年間にみられるバリ・ヒンドゥの変容についてふれておこう。かつて訪れたことのあるアンガバヤの家々の sanggah をみても、また pura desa とよばれる村の寺院の境内に入っても、新しく建て直されたところでは殆どといってよいほど、かつて padmasana といわれた祠が数多く並んでいる祠にくらべると、ひときわ大きくなり、立派なものになっていることがとても印象深い。また、pura desa で出会った村びとたちに「この祠は何か」と尋ねると、「これはもっとも重要な最高神 Sang Hyang Widhi が祀つてある祠です」という。このことは、それぞれの家の sanggah とよばれる屋敷寺についてみても、返ってくることは同じである。バリの村々を二十数年間観察してきたものにとって、この変化はきわめて大きい。この二十数年の間に、村びとたちのいう最高神 Sang Hyang Widhi が、バリの人びとに強く意識されるようになってきていることのあらわれである。

インドネシアは日本にくらべると、宗教が日々の生活をより強く規制している社会である。ここでは、それぞれの人びとは身分証明書（KTP）を常に携帯している義務を負わされている。身分証明書には自らの信仰する宗教を記載する項目があり、どのような宗教（agama）を信仰しているかが重要視されている。アガマとは、インドネシアでは宗教省によって公的に認知された宗教のことである。それはイスラム、カトリック、クリスタン、ヒンドゥ、ブッダの5つのいずれかを指す。いずれにしても、人びとはこの公認された5つのアガマから選択することを暗黙のうちに求められているのである。インドネシアで公認のアガマとは憲法にも明記されているように一神教を信仰し、それに対応する教典教義

を備えた宗教ということである。その結果、かつて様々な神々をかかえる多神教のバリ・ヒンドゥは、国家設立の当初アガマとして認知されていなかった。従って、バリ・ヒンドゥはイスラムやキリスト教を準拠枠とし、それらに出来るだけ近づく形で教義を整備し、それによってアガマとしての地位を築くよう、せまられてきたといえよう。ここでは、植民地支配を自らの手で打倒して、独立の担い手となった人びとの精神的紐帯がイスラムであったこともあって、独立の当初からイスラムを国教にしようとする動きはきわめて強かった。しかし、1950年代についてみれば、当時、政治的リーダーたちに強く要請されたことは、何よりもまず旧オランダ領東インド全領域を分裂させることなく、一つの国家として成立させることであった。そのためには、たとえムスリムが全人口の9割を占めているとはいえ、他の宗教を信奉している人びとの多い地域を無視することは出来ず、その結果、政府は圧倒的多数を占めるイスラム勢力に妥協させ、パンチャシラに唯一神への信仰という条項をかかげることで、宗教問題を決着させてきた経緯がある。

独立当時、パンチャシラでいう「唯一神への信仰」にかなり宗教といえば、イスラム、カトリック、クリスタンだけで、バリのヒンドゥはまだ「唯一神への信仰」をもつ公認のアガマとして認定されていなかった。バリのヒンドゥ教のリーダーたちにとっては、こうした追い込まれた宗教的危機状況のなかで、バリのヒンドゥ教を「唯一神への信仰」にどのように整合性をもたせるかに苦慮したといわれている¹⁴⁾。この点については、デンパサールに本部を置く Parisada Hindu Dharma の果たした役割は大きい。この組織が中央政府に働きかけ、バリのヒンドゥは Hindu Dharma という名称をもったアガマとして、公認されたといわれている。その後、スハルト体制のもとでは、無神論を唱えてきた共産党の非合法化を口実に、開発独裁に反対する反政府勢力をおさえ込む政策をとってきたこともあって、宗教による統制が一段と強化され今日に至った。こうした中で、より一層バリ・ヒンドゥの制度化が進んだことは間違いない。かつてシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマなどのヒンドゥの神々や特定の名称さえさだかでない村の寺院に祀られているさまざまな神々の存在によって、「多神教」の様相を色濃くもっていたバリのヒンドゥ世界が、Hindu Dharma のパンティオンのもとでは、さまざまな神々は Sang Hyang Widhi という最高神が具体的な姿をとった仮りそめの姿であり、存在する神は唯一であると説かれるようになった¹⁵⁾。そのような意味で、限りなく「唯一神への信仰」という枠の中に近づいたアガマが教義のうえでは構築されてきたといえよう。これに沿って教典も整備されてきた。この点は従来からシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマの三神の三位一体性がインドのヒンドゥ教では主張されていたが、バリでは最高神に padmasana を据えることによって解決したものと考えられる。ただ、このようにバリ・ヒンドゥの大変革が教義のうえではなされたものの、一般の人びとが日々の生活のなかで行っている宗教的実践のレベル、たとえば供物をどのように供え、儀礼をどのように行うかという次元では、全くといってよい程、変化がみられない。この点はきわめて注目されることである。バリ・ヒンドゥの変容は、人口の圧倒的多数を占める一神教の国家のなかで、ごく僅かな宗教人口しかもたない宗教が、平和的共生を求めているかに生きのびていったかを知るうえで、きわめて示唆に富む事実をわれわれに提供している。

注

- (1) 集落 (banjar) へ中央政府の指令を徹底させるために、1979年集落ごとに lingkungan の制度がつくられた。プナティ村には現在10のbanjarがあるが、8つの lingkungan banjar になっている。banjar の Pahang Kaja と Pahang Tengah とを1つの lingkungan としている。また、Pahang Kelod と Semaga とを1つの lingkungan banjar Pahang Kelod としている。その他の banjar は、1つの banjar で1つの lingkungan となっている。
- (2) Clifford Geertz, *Form and Variation in Balinese Village Structure*, *American Anthropologist*, Vol. 61, 1959, pp.992~993
- (3) Miguel Covarrubias, *Island of Bali*, Oxford University Press, 1972, pp.265~269
- (4) R.Goris, *The Temple System, Bali : Studies in Life, Thought, and Ritual*, 1960, pp.103~106
- (5) 前田恵學「バリ村落のヒンドゥー寺院」『アジアの近代化における伝統的価値意識の研究』山喜房, 1978年, p.185
- (6) pura desa Bun, pura puseh Bun, pura dalem Bun は一括して1人の pemanku が世話している。
- (7) 『和歌森太郎著作集』第1巻, 弘文堂, 1980, pp.245~250
- (8) 竹田聰洲『祖先崇拜』平楽寺書店, 1957, pp.103~105
- (9) 柳田国男『先祖の話』筑摩書房, 1975. pp.71~74
- (10) Aのklian tempekan が pura desa, pura Taman, Ratu Gede (パロン), pura desa Bunを担当。
Bのklian tempekan が pura pusehとpura puseh Bunを担当。
Cのklian tempekan がpura dalem と pura dalem Bunを担当している。
- (11) 問学谷栄「バリ村落の基本構造」『アジア経済』19巻10号, 1975, pp. 8~11
- (12) 松永和人「『慣習長』と『公務長』—インドネシア・バリ島一村落における伝統的自治組織と近代的行政機構」『季刊 人類学』10-3, 1979, pp.56~68
- (13) Jane Belo, *Bali : Temple Festival*, University of Washington Press. 1953
- (14) Clifford Geertz, *The Interpretation of Cultures*, New York : Basic Books, 1973, 『文化の解釈学 I・II』(吉田・柳川他訳) 岩波書店 PP.182~189
- (15) 吉田禎吾『バリ島民』弘文堂 1992, p.150